
320 ノート(仮)

まいまい?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

320ノート(仮)

【Nコード】

N6484K

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

主人公は、存在しているようで、その話の中には、存在していない。

何か始まるようで、何も始まらず、それは終わることもない。

しんしょうふうつけい、しゅーるれあにずむってやつ？

不可解で不条理な世界。

こつこついつの、自己満足に走りすぎて、読者が置いてけぼりって
うんだね。

そう言うのが苦手な人は、戻るボタンを襲う（押そう）。
そうするのが、いい。

(前書きのようなもの)

題名のゆらいはもう、忘れた。

ただ、白い壁の前にいることだけは確かで、それだけは、はつきりと、覚えていてる。

人物は出てきても、それらは単なる無機物^{オブジェ}。人々がざわめいても、それは、木々の囁きと同じで、単なる背景の音でしかない。まるで昔に描かれた絵のように停滞していて、単なる移りゆく場面の一部なんだと思う。

主人公は、存在しているようで、その話の中には、存在していない。

何か始まるようで、何も始まらず、それは、終わることもない。

3

しんしょうふうけい、しゅーるれあにずむってやつ？

不可解で不条理な世界。

こういうの、自己満足に走りすぎて、読者が置いてけぼりって言うんだね。

そう言うのが苦手な人は、戻るボタンを襲^{押し}つ。
そうするのが、いい。

場面1：まるで霧がかかったかのように

永遠とも感じられる停止したその風景は、まるで写真か絵画のように、赤と黒の構図が流れるような太い流線で描かれている。移り変わっているのは、暮れの空のみ。夕空の色は、黄昏から、茜へ、そして群青に変わりつつあった。

その残照に染まる広い場所に、人が集まっている。それは、単なる野次馬と呼ばれているモノ。彼らは、集まってはざわめき、見守ること以外の行動は何もしない集団である。

その取り囲む人々の中心に、二つの影が身動きもせず立っていた。その影は、夕焼けの逆光にますます暗く影を落とし、そこにあった影の男は刃物を持ち、もう片方の腕で、女の首を背後から押さえつけている。女は、目の前にある鋭い刃物の輝きに、声も出さず、ただ震え、体を強張らせているだけであった。

数台の黒いカメラが、微動だにしない彼らの動きを、一つ残らず撮影していた。彼らは、女が解放されることを、願っているものの、心のどこかで、殺戮の絵を思い浮かべそれを切望し、絶望している。だから、カメラは回り、その情報に人々は集うのだ。

今、人ごみの中から少年がひとり、霧の中から現れるように、いつの間にか、人の集団から少し離れたところに、その姿を見せていた。淡々と男の背後へ回ると、瞬時のうちに腕をねじ上げ、刃物を地に落とした。囚われていた女は、男の腕をかくぐり、助かった喜びに泣きながら、人混みの中へと消えていく。

少年は、女の脱出を確認すると、ねじ上げていた腕をさらにしっかりと捕らえ、背負い地面に叩きつけるように、勢い良く投げつけた。

地に頭を打ち付けて、白く薄れ行く意識の中で、男は、その少年

のやけに真っ赤な唇が、にいと唾つよつつのを見た。

場面2・はつきりしない

霞のかかったような白い壁が見える。天井は、蛍光灯の灯りが、煌々としている。そこは、学校の廊下のようなのだ。壁の前には、一人の少年が座っていた。いつから、座っていたのだろうか。身動きもせず、ただ、うつろな目で、人の流れを見ていた。

廊下を歩いていく者たちは、誰一人として、その少年のほうを見向きもしない。長い間、そうしていたので、もしかすると、もうすでに、壁と同化しているのではないだろうか。そう思ってしまうほど、通り過ぎる人々は、関心を示さなかった。

向こうから、子供が、笑い声を発しながら、走ってくる。楽しいから笑っていると言う風ではなく、何かに憑かれたように、赤い唇は歪んだ笑みを浮かべている。

その子供は、狂ったように勢い良く白い壁にぶつかった。壁の薄い漆喰が剥がれ落ちて、石灰の白い粉が、霧のようにうっすらと、舞い上がりながら床に落ちていく。

何度も何度も、子供はその体を壁に打ち付けている。額からは、血が滲みだし、泣いているかのように頬を伝っても、痛みもせず、泣きもせず、ただただ、笑顔であった。

向こうから、また、子供が走ってくる。今度は、数十人もの子供だ。しかし、彼らは、笑みではなく、恐怖の表情を浮かべていた。皆、何かから逃げ出すように、外へ外へと、走り出している。果てしない階段を逃げおりにいる。

ふと、走る子供たちの背後に白衣姿の服の男が現れた。どうやら、この学校の先生のようなのである。逃げ惑う子供たちの最後尾を、ゆっくりと威圧を持って歩いている。彼は、壁に向かって、体当たりを

やめない子供を見つけ、駆け寄った。

そして、男は、その手に持っていた刃物で、子供の喉を音もなく、スツと一直線に掻っ切った。

白い壁と服は、飛沫で赤く染まっていく。白化粧の粉は、朱の雫を吸って、凝固していく。みずみずしい光沢を持つ赤珊瑚が、その足元に散っていく。抱えきれないほど大量の赤い珠が、白い床を転がっていく。

倒れこむ子供は、笑ったまま、勢い良く倒れていく。壁にあいた穴の中に、頭から落ちていく。

その死体となった手から、古いノートがぱさりと落ちた。開いたそのページには、雑な字でなにやら書いてある。なんとか、読解は出来そうだったが、まるでその文字は、呪いの文字で出来ているように、生々しく歪み、滴る血に滲み、褐色に擦れていた。

まだ乾かぬ濡れた刃物を持ったまま、先生はそのノートに書かれた呪いの言葉と同じ文字を、繰り返すだけであった。

それを皮切りに、動くモノを手当たりしだい斬りつけ始めた。子供たちは切られ死んでいく。少年は、壁の前で、ただ、それをぼんやりと見ていた。

階段はどこまでも続いている。

場面3・そう、彼は言った

白い壁の前にいる少年は、まだ座っていた。よく見てみると、『あいむスリープ』と書いてある紙を額につけている。おかしい映像ではあるが、誰もそのことに言及しない。それは、その紙の持つ不思議な特性というのではなく、ただ単に、他人を気にしているヒマなどないのである。まだ見えてこないが背後から確実に、赤い匂いを伴った気配がやってきているのだから。遠く続く廊下を、終わらない螺旋の階段を、駆け下りるので精一杯なのである。

座っている少年は、子供たちが廊下を階段を駆け行き、斬られていく様を目に映していた。目は開いているものの、彼は騒ぎに全くと言って興味がないかのように、その目に光はなかった。もしかすると、この少年に見えるものは、単なる壁の染みなのかもしれない。続く廊下を逃げ惑う生徒たちも、朱の斑を足跡に残しながら歩いていく教師も、この奇妙な少年を見向きもせず、流れるように前を通り過ぎていったのだから。

子供たちの集団が途切れた頃、少年は額の紙を取り外し、立ち上がった。そして、その紙を壁と一体になってしまったかのような、今はもう動かない赤い物体に貼り付けた。紙は、水を吸って、たちまち赤くなって、黒い文字はにじみ、読めなくなってしまった。

少年は、濡れた足跡の駆けている廊下を歩き出した。窓から差し込む斜めの光は黄昏の黄色で、もうすぐ全てが夜に包まれてしまうことを知らせている。どこまでも続く白い壁、音もなくなただ歩いていく。

生気を欠いた顔色の先生は、覚束ない足取りで、獲物を探すように、誰もいなくなった廊下を歩いていた。ふと、向こうから歩いてくる少年と、その廊下をうろつく先生の目が合った。空ろな表情が、

唇が、不気味にゆがむ。焦点の定まらない目で、手に持った凶器を振り上げ、少年に襲い掛かかる。

しかし、少年は落ち着いていた。あわてることもなく、その手に持っていた刃物に向かって、足蹴りをした。それは、折れて、床に落ちる。単なる2本のさびた鉄の棒が、転がった。少年は、すぐにそれを拾うと、窓に向かって投げ捨てた。ガラスは割れ、校庭に落ちていく。碎ける硝子と、木々の葉の擦れて囁く声の中に、鉄の力ランと鳴る音が、響く。

凶器を失っては、怖いものはないと、教師のいる方に眼を向けると、その姿は、もうすでになかった。どこかへ行ってしまった。消えてしまったかのように、白い壁の続く通路は、閑散と蛍光灯に照らされていた。

少年は、窓から校庭を垣間見た。見てみれば、そこは、校舎から出てきた人であふれかえっていた。先ほどまで外をめざし廊下を駆け、生き延びた者たちであろう。

その集団は、漣のように陰影を細かく揺らし、二つの影法師を取り囲むように、並び始めた。人混みの中心に、男と女がいる。男は鋭い刃物を持ち、もう片方の腕で、女が逃げないようにしっかりと捕らえている。その男は、先ほどまで、ここにいた教師にどこか似ているような風体であった。囚われた女は、いつ開放されるとも知らない恐怖に、体が硬直していた。彼らは黄昏に照らされて、その長く伸びた影と同じ色に染まっている。

夕焼けの迫る、赤い画布の上の、その赤と黒の対比は、「コントラスト」油絵の具で書いたかのように、鮮やかに流動の線で描かれている。

このまま、ずっと、変わらずに夕闇が世界を覆い、闇に消えてしまふのかと思われたが、一つの小さな影が、人混みの繁みから現れ、女を助けたのが見えた。女は、その場から、駆けて逃げる様子が見えた。それと同時に、ざわめく人の集団が動き出す。ざわざわと、木の葉を揺らす風のように、静寂の中に揺れている。

そして、日没と共に、深く霧がかかったように、いつしかその人の群れは、闇に見えなくなる。彼らは全て融けて見えなくなつた。その暗闇は、目の中に映りこんで、さらに深く世界を染める。何も見えない、すべてが霞に覆われて、ただ一つ、廊下の天井に浮かぶ蛍光灯の灯りが、近づいてくるように感じた。

場面4・彼は、何を考えていたのか

はつとして辺りを見回すと、そこは夕闇に沈んだ廊下ではなく、広々とした明るい空間であった。その部屋の電灯が、宵闇に似た黒色の机板に輝きを与えている。目の前には、液体の入った硝子の瓶や試験管、様々な実験道具が並んでいる、そこは学校の理科室だった。どうやら、いつの間にか眠ってしまったらしい。

今から、なにか実験をするのだろう。教壇にいる白衣姿の者が淡々と、黒板に白いチョークで文字を書いていた。この教師は、一体何を黒板に書いているのだろう。単なる線の集合体。まだ、頭がはつきりしないせいか、黒板に白いチョークで浮き出る記号や図形が何を示しているのか、入ってこない。手元にあるノートは、蛍光灯の色に染まって、さらに白い。何も書かれていないそのページは、まるで、あの壁と全く同じ色である。

黒板に文字を書く音が止まった。それを合図に、生徒たちは、規則正しく並んだ試験管や、液体の入った硝子の容器をおのおの手に取り、作業を始めた。手に試験管を持ち、硝子の棒で、ピーカーに液体を移している。アルコールランプの炎、フラスコの中で液体は沸騰し始めていた。説明書の通り、決まった動きしかしない機械のように、その動きはみな一様で、まるで工場の生産ラインを、監視カメラで眺めている風景と見間違うほどに、無駄がなかった。

まだ、意識のはつきりしない少年は、他の生徒たちがするその動作を、その様子を見ていた。沸騰した透明なフラスコから、見えないう煙がもくもくと、出ている様子が観えた。まるで、世界を覆う霧を製造しているかのように、それは意識にかかっている。はつきりとしないう視界の先で見渡せば、その教室の中で、子供たちは、意識を失っている。苦しんでいる様子はない。本当に、眠っているかのように、穏やかな表情で、そこに倒れていた。

再び、薄れ行く意識の中、駆ける足音を気配を感じた。この教室から、去るようにだんだん小さくなっていく。運よく理科室から出できた生徒たちが、この狂気に満たされた空間から逃げる音なのだろう。しかし、そんな他のところで起こっていることは、もうどうでも良いのだ。この心地よい霧の中、真っ白な空間にずっといれるのだから。

かすかに動いていた肩の上下の動きが、徐々に消えていく。景色は、さらに霞にかかって、見えなくなっていく。まるで、死んでいくように、世界は眠っていく。

場面5・それはおそらく霧の中だろう

太陽光に黒く反射するカメラは、映し出していた。校庭に、人が集まる様子を。避難してきた人たちであふれかえっているこの景色を。そこから、校舎を見上げれば、あの教室に取り残された生徒たちが、倒れていく様子が映し出された。校庭で、人々が見守る中、取り残された者たちは、静かに崩れていく。どうすることも出来ない彼らは、ただただ、その様子を見ているしかなかった。

日は傾きかけ、被写物の影は長い。その影に混じ入るように、人混みの影は揺らいでいた。赤と黒の境界線は薄明の中、はつきりと浮かんで見え、絵画のようにそこに記録している。人々は、この惨事に悲しみ揺れていた。しかし、女の金切る悲鳴が、その耳に響くと、意識はその方向に集まった。彼らの見つめる先には、もう校舎はなく、その瞳には、混雑した中にある二人の人物を映していた。それは白衣の男が女を人質にしている様子であった。男は手に刃物を持ち、あいている方の腕で、女の体を、がっしりと拘束していた。女は、引きつった顔でおびえている。

しかし、人の茂みは波立つだけで、何もしない。ただただ、起こっている出来事を見ているだけ。どこかで見たような夕焼けの空と、染まる広場の木々の長い影が、まさか、またか、というざわめきにも似た木々のささやき声が、微かに、風に乗ってやってきた。

その波をかき分けて、少年がひとり現れた。そして、あつという間に、男の背後に忍び寄り、腕をねじ上げる。女は、男が怯んだ隙に、その緩んだ腕から逃れ、人の込み合う方へ駆け出していく。少年は、女が離れていく様子には、目もくれず、男の腕をつかみなおすと、勢いよく投げ飛ばした。男は、地面に叩きつけられたが、すぐに起き上がる。あまり、傷を負っていないようだ。

少年は、男と対峙している。

いつの間にか、少年の手には、2本の凶器が握られていた。少年は、狂気に満ちた笑みを浮かべた。そして、それを構える。これから、再び、殺戮のゲームがはじまるのだ。

その狂気を振り上げて、しかし少年と男は、黙ったまま静かに笑んでいた。その様子は、破裂寸前の風船のように、妙な緊張感と静寂を孕んでいた。その風船が破裂してしまつたら、破片はどこまで被弾するのだろうか？ 今、目の前にあるのは、柔らかなゴムの風船ではなく、狂気を内包した鋭い凶器なのだ。今まで、目撃するためだけに集まっていた野次馬たちは、その身に降りかかる恐怖を察し、たちまち霧のように四散した。

人は散っていく。人の影は、白い残像を残し、あたりは、霧がかつたように、徐々に夜の色に染まっていく。形あるものを全て飲み込んで、野次馬たちを、その色に溶かしていく。

場面6・人は輪郭のはつきりしない事象

目の前に白い残像がかかっている。

そこは、すべてが真っ白であった。よくよく見てみると、それもそのはずで、視界が白いのは、太陽の光が差し込んで白く彩りを添えた、壁に囲まれた部屋にいるからだ、ということに気がついた。先ほどの景色は、夢だったのだろうか。

確かに、そこにいて、見ていたはずなのだが、自分が一体何をしているのか、記憶がない。なぜ、ここにいいのか、それさえも、覚えていなかった。

動いてみると、何か手に当たった。薬品の入ったケースや瓶だ。黒光りする机の上に、液体の入った硝子の容器が並んでいた。少年は、それらの容器を手にとつては、光に透かし、再び机に戻す。

綺麗な瓶、棚から薬品をいくつか、取り出し、机に並べる。綺麗な液体、手に取り、眺め、机に置く。その動作を、意味もなく、繰り返す。

硝子の瓶に半分ほど入った透明な液体は、それはとてもおいしいうちに見えた。こんなにも彩り鮮やかな薬品がなのだから、もっと、たくさん液を混ぜたら、この器にいっぱい満たしたのならば、もっと美しい色になるかもしれない。少年は、目に付く液体を次々に手に取った。どんなに混ぜても、液体は透き通つたまま、純粋な色に混ざっていた。

突然、飲んでみたいと言う、そんな衝動に駆られ、少年は、瓶のふちに口をつける。鼻につく異臭でさえ脳に染み渡り、舌に感じる刺激はとろけるような熱を持っている。瓶の中の液体が胃の中へ熱く流れ、粘膜に冷たく消えていくのと同時に、心地よい感情が満たしていく。幸福が、世界を満たしていく。少年は、部屋を飛び出して、そのまま廊下を走り出す。自らの安息の場所を探して、白い壁に囲まれたその廊下を、果てしなく遠くまで続いている壁の前を駆

けていく。この廊下にある突き当りの壁も華麗な石灰の白い色である。その壁の前まで行ったら、その壁になる。白い漆喰を赤く染めながら己の身体を、斑に滴らせるのだ。

幸福が、世界を満たしていく。どこまでも続く廊下の果て、あの、穢れのない、白い壁が、もう目の前だ。もうすぐ、あの壁と、同化できる。溶かし込める。その幸福に世界は満たされて、少年は、そう思うと、笑いが止まらない。不自然な笑みが、紅唇を歪な形にのせて浮かんでいる。

狂信的な信者の礼拝のように、壁に何度も繰り返すその身を捧げている。剥がれ落ちた漆喰が、それに答えるように、光をまとい舞い上がる。幸福が、世界を満たしている。額からは血がしみだし、涙しているように目じりの横を伝っても、ただただ、その微笑を絶やさなかった。

鋭い痛みが首筋に走って、世界の色が赤色に満たされても、少年は幸福だった。白くて暗い壁といたいになれたのだから。

少年の指先は、赤いインクで濡れている。そして最期に、少年はその指で、その腹で、その赤い色のインクで、この白い壁に、別れの言葉を書き残すのだ。

さようならと。

場面7・物事は全て霧のせいにする

意識が朦朧としている。頭がぼんやりと重い。ここは、もう、あの壁の中だろうか。少し息苦しいが、暖かく心地よい。あとは、ゆつくりと死への移行を待つだけである。蛍光灯の光が煌々としている。白い天井が、視界の端にぼんやり見えた。目の前には、白い霧を上げている硝子の瓶があった。そこは、壁の中ではなく、いつか見た理科室だった。

先ほどまで実験をしていたのだろうか、アルコールランプの炎がまだ揺らいでいた。しかし、結果を記録するものの姿は見えない。霧がかかる視界の端に、倒れている子供達の姿が見えた。

硝子の実験器具からは、まだ、透明な気体が発生しているのが見える。その実験は失敗している。そのせいで、このまどろむ意識が迫ってきているのだろう。実験の失敗の理由を少年は肌で感じていた。誰かが、薬品を意図的に混ぜたのだ。無造作に混ぜられた薬品のラベルは、もう意味を成さない。

白色の意識の中にある。子供たちがざわめく声がする。まるで、それは悲鳴のようだ。

少年は、見ていた。教壇の上にいる白衣の男を。そこで一部始終を見ていた教師は、目の前で起きている惨劇を、信じる事が出来ずに、立ち尽くしていた。しかし、次々に動かなくなる子供たちを見て、現実気がついたとき、今後問われるであろう責任におし潰され、その脆弱な精神は、あっという間に、砕けた。全て、目の前から消してしまえば、と。動くものすべて、凶器で斬りつけていく。白衣は血煙にたなびいて、生徒達は次々にこと切れる。白と赤の滴る霞の中に次々と倒れていく。

少年は、見ていた。教室の外へ向かう白衣の男を。再び、薄れ行く意識の中、たくさんの子供たちの駆ける足音を聞いた。その音は、

意識と一緒に、だんだん小さくなっていくのを感じた。

少年は、見ていた。生徒たちは、駆けていくのを。長い廊下を、階段を。そして、その校舎からは、次々に人が飛び出してくる。校庭は避難してきた人影でたくさんにあふれ、そこから、あの教室を見守っていた。

その校舎から出てくる生徒たちの集団が途切れた頃、一人の少年が昇降口に現れた。他の者とは異なり、急いでいる様子はなく、落ち着き払っていた。校舎から出て、少し歩いたところで少年は立ち止まる。校舎と花壇の間に光るものがある事に気がつき、そちらの方に向かったのだ。それは、硝子の破片にまみれて、それは黄昏の色に散乱していた。その中に、二本の鉄の棒が落ちていた。少年は硝子の破片をどかしながら、その凶器を手を取った。もともと1本だったのだらう。真ん中から綺麗に折れていた。しかし、まだ鋭い輝きを持っていた。

少年は、その切っ先にひとさし指を当てた。水銀のような、しかし赤い色の液体が、表面張力で半球の形になって、指先に現れた。少年は、それを口に含んだ。錆びた金属に似た味が、舌に転がっていく。少年は、朱色の唇で、静かにほほ笑んだ。

それと時を同じくして、突然、校庭にひしめく人の中から女の悲鳴がした。少年は、その叫びのした方に、視線を向けた。人の群れは徐々に、その震源地から距離を置くように移動し始めた。群衆の中央には、男に後ろから羽交い絞めにされた女がいた。男の手には、赤い雫を滴らせた刃物が、輝いている。少年は、鞆の中にその凶器をしまおうと、その妖しげに煌く甘い匂いに誘われるように、人波をかき分けていく。

少年は、男の背後に忍び寄った。そして、男の腕をつかみ、背負い投げた。男が立ち上がるまでの間に、少年は鞆の中から、先ほど拾った刃物を取り出した。二人の凶器を持った者たちは、向かい合う。

そして、同時に、胸元に、その凶器を、刺し合い、飛沫を上げて、地に、落ちていく。薄れいく意識、胸に刺さった刃。そこからあふれ出る生命のぬくもり。自分の頭がだんだん重く、地面が近くにみえてくる。まぶたが重い。闇色に染まった空がぼんやり見える。白くなっていく意識、風にたなびく霧のかかる夜のそら。口から吐き出す息さえも白い。空の雲、白い雲、目の前を覆いつくしていく。

すべてがその靄に溶けてしまった。

場面8・それは、終わらない

遠のいた意識の中で、目の前は、ただただ、白い。何も見えない空の色。もうこの手は、届かないのだろうか。そう伸ばした指の先は、何かに触れている。目の前が白いと思ったのも当然で、手は白い壁に触れていた。気がついてみれば、壁が見えているだけであつた。

それまで少年は自分はここで、眠っていたのかもしれない。

少年の前を通り過ぎる人々は、だれも、この少年のことを気にかけない。廊下をさまよいる子供たちは、何も見ていない。もしかすると、廊下を歩いている人々は、窓から差し込んだ光が作り出した単なる幻影なのではないだろうか。そう思えるほど、そこで動く者たちは、右足、左足、右足と同じ音を繰り返し歩いていた。歩いても歩いても、終わらないその世界を歩いている。

どこかへ向かうどこまでも続く白い壁。いつまでも終わらない廊下。そんな中、はじまりの合図こえが聞こえてくる。少年は知っている。今まで、それを見てきたのだから。

少年はそれを全て知っている、廊下に広がる駆ける響き、その笑う音が何を示しているのかを。

少年の横を、白い漆喰の粉が光に煌き舞う霧の中を、たくさんの生徒たちが駆け抜けていく。殺戮の影に追われた者たちの、その白化粧に滴る雫は、真っ赤に染まり、終わりのない廊下は、どこまでも続くだろう。そして、外に出たその黒い影は、女を人質に取り、そして。

白い壁を少年は見つめている。

全てを見てきた少年は、悲しみに廊下の壁の前にたたずんでいた。少年は、空ろだった。いつしか、その悲しみが実感に変わってい

く。

その壁は蛍光灯に照らされて、何もかかれていないノートのように真っ白だった。その壁に指を走らせると、白い粉が指についた。少年の指が壁に残した軌跡は、チョークで書かれた文字のよう。少年は、最後に、目の前に広がる白い一面の壁、消え消えな色で、文字で、はっきりと、呪いの言葉を、こつ書き散らした。

さようなら、と。

場面9・夢のよつで（前書き）

だまされてはいけない。
それは挿絵です。

場面9・夢のようで

少年は、薄汚い階段の一段一段に、足を乗せて歩いていく。その階段の終わりは斜めに差し込む黄色の光に染まっている。小さなほこりが照らされ、上に下に虫のように舞っている。淡い色の暮れの昇降口には、誰も姿も無い。下駄箱の影が、スノコの上に落ちていくだけである。静まり返ったその場所の壁は、さらに白い。

少年は、白いコンクリートの柱によりかかると、ノートを取り出した。

僕は彼が死なないうよう、願いをこめて毎日ノートに書き記しているのだ。

白い紙の上に、黒いインクの文字がそう躍る。この言葉に、何か意味があるのだろうか、否、真意などはない。思い浮かぶことばを、ただ並べただけなのだから。意義などあるはずがないのだ。

気がつけば、いつでも、白い壁の前。眼を開けば、また、壁の前にいる。

自らの死を夢見ている。

子供は綺麗な色の薬を飲んだ、子供は狂ったように走りだし、壁に赤いしみをつくりだす。実験は失敗し、生徒たちは霧に意識を失った。教師は狂い切りつけ、生徒たちは逃げまどう。男は女を捕らえ、少年は女を助け、少年は男を斬りつける。

しかし、その夢には続きがある。どこまでも続く廊下のように、果ての無い流れの始まりへと。さらに、少年はそう書き綴る。

まだ、おわらないのだ。その殺戮は、再び始まっている。

走り出す子供たちの群れ。

その謎の少年は、だれにも気づかれぬ。

その僕と彼は、終わらない。

どこかで見たとような文字の羅列が、意味を成さない記号のように、

並んでいる。単なる曲線と直線の黒い集まりが、そのノートには、描かれていた。

少年は、そのノートから目を離し、ふと顔を上げた。向こうに見える校庭に人が集まっていた。それは、ざわざわとざわめくことしかしない、木々の葉の囁きのように、風に揺れているだけである。西に傾く太陽の逆光に、人々の色は絵筆で書いたかのように、赤と黒の濃淡グレイティションに染まり、長く影を伸ばしている。

それは、終わらない夢のようで、まるで、霧がかかったかのように、はつきりもしない。そう、彼は言った。彼は何を考えていたのか。これは、おそらく霧の中だろう。人は輪郭のはつきりしない事象、物事は全て霧のせいにする。それは、終わらない夢のようで、まるで、霧がかかったかのように、はつきりもしない。

そう、彼は言った。

彼は、何を考えていたのか。それはおそらく霧の中だろう。人は輪郭のはつきりしない事象、物事は全て霧のせいにする。

それは、終わらない、

夢のようで、

まるで、霧がかかったかのように、

はつきりもしない……

そう、彼は言った。僕は、何を考えていたのか。それはおそらく霧の中だろう。少年は、それを、すべて見てきた。だから、知っているはずなのだが、まるで、霞のかかったように、何も思い出せない

い夢のよう。思い出せば、はつきりとしな、いつも同じ白い景色。それがすべてだった。

そして、少年は、ページを最後までめくり、まだ何物にも染まっていない無垢の白い場所に、かすれた文字で鮮明に、こつしたためるのだ。

さようなら、と。

そして、少年は広場に群れる集団の方へ向かって歩き出す。その姿は、人混みが形作る霧の中に、融けていく。

> i 6 3 7 7 | 3 1 2 <

そして、白い空間で眠りに落ちた彼らは、また、それぞれの悪夢の続きを見る。

> i 6 3 7 3 — 3 1 2 <

永遠とも感じられる停止したその風景は、まるで写真か絵画のよ
うに、赤と黒の構図が流れるような太い流線で描かれている。

移り変わっているのは、暮れの 空のみ。

夕空の色は、黄昏から、茜へ、そして群青に変わりつつあった。

その残照に染まる広い場所に、人が集まっている。それは、単なる野次馬と呼ばれているモノ。彼らは、集まってはざわめき、見守ること以外の行動は何もしない集団である。

その取り囲む人々の中心に、二つの影が身動きもせず立っていた。その影は、夕焼けの逆光にますます暗く影を落とし、そこにあった。

影の男は刃物を持ち、もう片方の腕で、女の首を背後から押さえつけている。女は、目の前にある鋭い刃物の輝きに、声も出さず、ただただ震え、体を強張らせているだけであった。

数台の黒いカメラが、微動だにしない彼らの動きを、一つ残らず撮影していた。

彼らは、女が解放されることを、願っているものの、心のどこかで、殺戮の絵 を思い浮かべそれを切望し、絶望している。だから

……

（
続
く
）

(後書きのようなもの)

人々は、夜の中へ散っていく。その星の見えない澄んでいる空気の間に、いつでも、意識は白に溶けていく。すべてが、覆われて、気がつけば、いつも見えるのは、白い蛍光灯、白い壁、どこまでも続く廊下、階段。彼は、そこにいるのに、いなくて、周りが勝手に、動いている。同じ場面を、ただ、繰り返すだけの夢。その場面が進むたびに、原因と結果の情報が増えていく。けれども、だからと言って、何一つ、理由が分かることはない。単なる事象と言うものは、理解しようとしても、それだけでは、できないもの。同じ夢を、ただ繰り返しているのだから。

後何回、くりかえせば、この悪夢から、目が覚めるのだろうか。繰り返されるその夢の中にいる間は、感情はなく。気がついた後も、それがどんなに恐ろしい夢であろうとも、思ったほど何も感じていない。緩やかに死んでいるかのように、淡々と。働かない感情
ああ、そうか。彼はまだ、夢の中にいるんだね。今だに、そこに残っている。

僕は、彼なのだろうか。彼が、僕なのだろうか。
そもそも、今、見ている意識は、夢を見ている持ち主のものだろうか。彼が、この夢を見ているのではなく……誰かが見ている夢の登場人物に過ぎないのではないだろうか？だとすれば、夢の登場人物に過ぎない僕らは、自分の意思で覚めることはできない。

誰が、誰が、だれが？

夢を見ている本人が目覚めなにかぎりは……

だれが、夢を見ているのか。

ここにいないモノが、見ている。

夢を見ている君が、気がつくまで、この夢は覚めないのかも
しれない。

(後書きのようなもの) (後書き)

320ノート(仮)の題名の由来。

実は、自分には、由来なんて、わかりません。

そもそも、夢に出てきたあのノートの表紙に「320ノート」と書いてあったのだから。ただそれだけなのだから……

しかし、320と言う数字について、思うこと。

……ああ、確かに、この数字の思い出す日付がある。

その日に見た記憶は……どこまでも続く薄暗い地下の白い壁。人々は、倒れている。「見えない何か」から逃れるように、一段一段が遠い階段をかける人々。人は外の広場にあふれていく様子。

病院に人は集められて。白い廊下に。蛍光灯の光の下に。まるで学校の理科室のような、薬品の匂い。倒れている人々。全てが白い空間。廊下、階段。人であふれている白い世界。

そう、あれは、1995年3月20日、平日の月曜日。

場所は、東京都の地下鉄。ラッシュアワーのピークするとき。

そう、それは、無色無臭の神経ガスがまかれた日。

その日だということは、覚えているんだ……

ああ、めまいがするよ。視界がぼやけるよ。

体も熱い。意識が、記憶が熱く溶けるよ。

まるで、どこかで見たような風景じゃないか。

夢の続きのようで、しかし、終わってしまう果ての無い流れの始まりの。

人物は出てきても、それらは単なる無機物^{オブジェ}。人々がざわめいても、

それは、木々の囁きと同じで、単なる背景の音でしかない。まるで昔に描かれた絵のように停滞していて、単なる移りゆく場面の一部なんだと思う。

主人公は、存在しているようで、その話の中には、存在していない。

昔見た場面だけを、繰り返す。その場所に置き去りにされた記憶たち。

何か始まるようで、何も始まらず、それは、終わってしまふ。

その夢は、終わらない。さまよう、さまよう。闇の迫る場所、人ごみの中を

そして、白い空間で眠りに落ちた彼らは、また、それぞれの悪夢の続きを見る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6484k/>

320ノート(仮)

2011年7月9日09時11分発行